

【テーマ】 江戸時代の暮らしにびっくり！

【対象】 小学校 5・6年

【所要時間】 20分

【紹介する本】

	書名	著者名	出版社	出版年
1	お江戸の百太郎	那須正幹／作 小松良佳／絵	ポプラ社	2014
2	エコでござる-江戸に学ぶ 3の巻	石川英輔／監修	鈴木出版	2009
3	江戸しくさから学ぼう 第3巻	秋山浩子／文 伊藤まさあき／絵	汐文社	2008
4	江戸のお店屋さん [その1]	藤川智子／作	ほるぷ出版	2013
5	江戸時代の暮らし方	小沢詠美子／著	実業之日本社	2013

【シナリオ】

●導入

日本の首都はどこでしょうか？東京ですね。東京は昔、江戸と言われていました。その江戸を中心に政治を行った時代を江戸時代と言います。江戸時代は約260年間続きましたが、その間は戦争がなく、人々が平和に暮らしていました。たくさんの文化も生まれました。今日はそんな江戸時代に関する本を紹介します。

1 『お江戸の百太郎』

表紙を見せて

まず最初の本は、江戸の町で起こるいろいろな事件を、名推理で解決していく男の子百太郎のお話です。百太郎の父、千次（せんじ）は岡っ引きという現在の探偵のような仕事をしていますが、腕はさっぱりでなかなか事件を解決できません。百太郎は持ち前の機転の良さや行動力で父を助けます。

この本は短編集で4つの話が入っていますが、第2話「道をきくゆうれい」は、夜中の12時になると金貸しのお糸（くめ）ばあさんの幽霊が、金を貸した相手の家に現れ借金の取り立てに回るとい話です。幽霊は、借りた金額や利息の額をきっかり請求するといいます。ある日、お糸ばあさんにお金を借りていた旗本のお殿様が、幽霊にのどを食いちぎられて死んでしまうという事件が起こります。百太郎は名推理で幽霊の正体を暴いていきます。

p.67を見せて

百太郎は寺子屋という、今の学校のような所に通っています。師匠の秋月（あきづき）先生は書道の他にも、剣道と柔術の達人で、百太郎が困った時にいつも助けてくれる頼りになる先生として登場します。この本では謎解きにドキドキするだけではなく、読んでいるうちに江戸時代の暮らしや、食べ物、社会の仕組みもわかるので、おもしろい一冊です。

2 『エコでござる-江戸に学ぶ 3の巻』

今の話に、寺子屋が出てきました。大阪などでは「寺子屋」と言いましたが、江戸では「手習所」

と言いました。

この本では、江戸時代の暮らしについて紹介されています。

p.22～23を見せて

現在のように学校がなかったので、7、8歳になると3年から5年間手習いに通ったそうです。ひらがなの読み書きやそろばん、手紙の書き方、商売で使う言葉、礼儀作法や道徳を習いました。

いくつか指して説明する

朝7時半くらいから始まって、午後2時半くらいに帰りました。年齢に関係なく、みんながひとつの部屋で勉強し、教科書は師匠がひとりひとりに合ったものを選んだそうです。ふざけていると、お仕置きとして水を入れた茶碗と線香を持って立たされることもあったそうです。

p.6を見せて

「江戸ブランドはエコブランド！」と書いてあります。江戸時代の服は着物ですが、全て天然の繊維から作られていて、木綿や麻などは畑から取れる材料が使われています。そして布を織るのも、着物に仕立てるのも自分たちで行いました。

p.9を見せて

また、今のようにプラスチック製品がないので、木や竹を上手く使っているいろいろなものを手作りしました。竹は細くうすくさいて編んでかごやざるにしたり、提灯の骨組みにしたり、小枝からほうきをつくりました。皮はおにぎりを包むのにも使いました。身近にあるものを使って手作りし、工夫して生活していました。またそれをつくる専門の職人さんがたくさんいました。

3 『江戸しぐさから学ぼう 第3巻』

江戸にはたくさんの職人さんがいて、みんな自分の仕事を一筋にがんばっていました。自分の立場や実力を知り、出しゃばらず、自分の範囲をわきまえて、相手の範囲に入らないようにしていました。それを「結界（けっかい） わきまえ」といいます。背伸びをしないで自分らしく生きることが大事だと考えていました。

p.26 9行目～19行目を読む 【現代では、たいていのものはスーパーやコンビニで売っています。～（中略）～「結界わきまえ」は、まち全体が繁昌して、ともに生き残っていくための知恵でもあったのです。】

その他にこの本には、「お心肥（しんこ）やし」「三脱（さんだつ）の教え」「もったい大事」などの言葉がでてきます。どんな意味か気になった人は、この本を読んでみてくださいね。江戸の町には当時たくさんの人が集中して暮らしていました。そのため、どんな人とでも仲良くやっていくための知恵や心遣いが必要だったのです。このように皆が平和で気持ちの良い毎日を送るために、身につけておきたい心構えのことを江戸しぐさといえます。現代に生きる私たちも、江戸しぐさから学ぶことがたくさんありますね。

4 『江戸のお店屋さん [その1]』

さて、江戸のお店は専門店が並んでいるということでしたが、では実際にお店をのぞいてみましょう。

p.2～3を見せて

まず、このお店（p 3右端の店）に入ってみましょう。

p.8～9を見せて

ここは、「薬種屋（やくしゅや）」というお店です。現代での薬屋さんです。生薬（きぐすり）という、薬のもとになる木の根や皮を混ぜて、薬を作り、売っていました。このお店にしかない商品もありました。また、今のドラッグストアには化粧品や食品などいろいろな物が売っていますが、薬種屋は、薬だけ売っています。

p.10～11を見せて

薬のもとになる生薬には、例えば桂皮（けいひ）という熱や腹痛に効く薬があります。飴やお菓子の香辛料として使われているシナモンのことです。杏仁（きょうにん）というあんずなどの植物の種は喉の痛みや咳に効きました。これらが店の奥にずらりと並んだ、小さな引き出しのなかに入っていて、配合して薬として売りました。

p.20～21を見せて

ここは、お菓子屋さんです。

p.22～23を見せて

店先にその日に売るお菓子の見本を出して、お客さんはその中からほしいものを選んで買っていました。江戸ではお饅頭や羊羹の気が高かったそうです。この本には、その他にも今でいう、本屋や銭湯などいろいろなお店が載っています。まるで江戸時代で買い物をしているような気分になれます。

5 『江戸時代の暮らし方』

さて、前の本ではお菓子屋さんがでてきましたが、3時ごろに食べる「おやつ」という言葉は江戸時代の時刻の呼び方から来ています。

p.24～25を見せて

江戸時代のカレンダーは今のカレンダーと違って、月の満ち欠けに合わせたものでした。その年によって日付や月が変わります。また、時間も、日の出から日の入りまでを6等分して決めるので、季節によって長さが変わりました。時計がなかったので、時刻を知らせる「時の鐘」というものが、お寺など町中に設置されていました。午後2時くらいのことを「八刻（やつどき）」と言い、鐘が8つつかれ、それがおやつの語源となっています。

p.46～47を見せて

江戸で暮らす人の主食はお米でした。また、江戸湾や相模湾など近くの海で獲れた魚や、周辺で栽培された野菜もあり、食生活は豊かでした。屋台では、そばや天ぷら、お寿司なども気軽に食べることができました。江戸は一人暮らしの男性が多く、外食をする人が多かったようです。このような江戸時代の料理文化は、現代にも大きな影響を与えています。この本は、町人の日常生活や住まい、遊びなど江戸時代の暮らしについて詳しくわかります。また、大名や将軍の暮らしや社会の仕組みもわかりやすく書いてあります。

●まとめ

江戸時代は、遠い昔の話ではなく、今の私たちの生活につながっていることがわかりましたね。今日紹介した本は全部図書館にありますので、気になった本は手にとって見てください。

【その他の本】 こちらの本もおすすめです。また、ご自身で追加・差し替えをするなど工夫してみましょう。

- ・『エコでござる-江戸に学ぶ 1の巻・2の巻』石川英輔／監修 鈴木出版 2009年
- ・『江戸しぐさから学ぼう 第1巻・第2巻』秋山浩子／文 伊藤まさあき／絵 汐文社 2007・2008年

- 『江戸のお店屋さん その2・その3』藤川智子／作 ほるぷ出版 2014・2016年
- 『建具職人の千太郎』岩崎京子／作 田代三善／絵 くもん出版 2009年
- 『肥後の石工』今西祐行／作 実業之日本社 1965年

山梨県立図書館 2018.3